内閣文庫
番號 和 11036
冊數 16（ 4）
函號 202 287

国立公文書館
National Archives of Japan

詩歌連狂
季寄註解

改正月令博物筌

夏之部

四月部目録

△印は俳諸の季とおもふべし

○養生の法　巡狩の次第　○米の豊凶　○物産其外家重法のこと　○甲斐はいしろさぎ

四月　月支　調子　陰陽生　異名

△立夏節　四ノ三丁　△小滿中　四ノ一丁

日令　此部は四月日の定りごとを記す

△更衣　△袷　△夏衣　△卯花衣　四ノ三丁　△なりさま衣　△あやめ衣　△白重

△青簾　四ノ四丁　女衣服　四ノ四丁

△主水司始供氷　四ノ五丁　△孟夏旬　△扇拜　四ノ五丁

△風炉の茶　四ノ五丁　△貴船神事　四ノ五丁

△筑摩祭　△ちべ祭　四ノ五丁　三日　△山崎日使　四ノ五丁

△稲荷祭　四ノ五丁　卯上　△大神祭　四ノ六丁

△八瀬祭　四ノ六丁　巳上　△久世祭　△山科祭　四ノ六丁

△多賀祭　△竪田祭　四ノ六丁　申上　△平野祭　四ノ六丁

国立公文書館
National Archives of Japan

△當麻祭　四月六丁
△松尾祭　四月六丁　上甲
△當宗祭　四月六丁
△大津祭　四月六丁　上亥
△擬階奏　四月七丁　七日
△灌佛　四月七丁　八日
△山崎天王祭　四月七丁
△戒壇堂閑帳　四月七丁
△地主祭　四月八丁　九日
△孔子供養　四月八丁
△土塔会　四月八丁
△吉田祭　四月九丁　中子
△近江八幡祭　四月九丁　中子
△菅宮祭　四月九丁
△炎本祭　四月六丁
△梅宮祭　四月六丁
△水屋能　四月六丁　四日
△廣瀬祭　四月七丁
△竜田祭　四月七丁
△薬師寺会　△法華会　△佛の華湯　△竜花會　△花御堂　△玉泉水
△戲山花摘　四月七丁
大峯上山　四月七丁
△神衣祭　四月八丁　十四日
△夏入　四月八丁　十五日
△千間の祭　四月八丁　十六日
△向日明神祭　四月九丁　中辰
△御蔭祭　四月九丁　中午
△園白賀茂詣　四月九丁　中申

△岩神祭　四月九丁
△賀茂の国祭　四月九丁
△坂本山王祭　四月九丁
△賀茂祭　四月九丁　中酉
△葵祭　四月九丁
△御形日　四月九丁
△葵桂　四月九丁
△管笠懸　四月九丁　中亥
△さが祭　四月十丁
△中山祭　四月十丁　十七日
東照宮御祭　△和哥祭　四月十丁
△高野花供　四月十丁　北一日
△夏駒牽　四月十丁　北日

月令

此部ハ四月一ヶ月日の定まらざるもの

△神祭　四月十丁
△斎刺　四月十丁
△榊取　四月十丁
△三枝祭　四月十丁
△茶誥　四月十丁
△煮酒　四月十丁
△矢数　四月十丁
△大矢数　四月十丁
△松前渡　四月十丁

時令

此部ハ四月の時候まかるもの

△首夏　四ノ十三ウ
△清和天　梅天　四ノ十三ウ
△卯花朽　四ノ十四ウ
△新暖　四ノ十四ウ
△短夜　四ノ十四ウ
○長日　四ノ十四ウ
○時衣　四ノ十四ウ
△卯の花衣　四ノ十四ウ

草木

此部は四月一ケ月の人さ木のくさとをうたえ一ふるし

△餘花　四ノ十四ウ
△桐の花　四ノ十四ウ
△檀の花　四ノ十五ウ
△択花　四ノ十五ウ
△実柑花　四ノ十五ウ
△柑子花　四ノ十五ウ
△乳柑花　四ノ十五ウ
△橙花　四ノ十五ウ
△抽花　四ノ十五ウ
△金柑花　四ノ十五ウ
△宝州橘花　四ノ十五ウ
△佛手柑花　四ノ十五ウ
△楠　蘆樹　四ノ十五ウ
△厚朴花　四ノ十七ウ
△秦椒花　四ノ十七ウ
△梭桐花　四ノ十七ウ
△柳花　四ノ十七ウ
△榎花　四ノ十七ウ
○槐花　四ノ十七ウ
△卯花　茅木　四ノ十七ウ
△藪椿　四ノ十九ウ
△牡丹　日州　薬州　四ノ十九ウ
△名取中　△富貴中　△よろの中　△花王
△白牡丹　四ノ二十ウ
△紅牡丹　四ノ二十ウ
△芍薬　四ノ二十ウ
△杜若　△かきつばた　四ノ二十ウ
○知母花　四ノ二十ウ
△一八花　四ノ二十ウ
△王孫花　四ノ二十ウ
△覆盆子　△州いちご　△蛇いちご　△ついちご　△木いちご　△犬いちご　四ノ二十ウ
△芥子花　四ノ二十ウ
○阿片　四ノ二十ウ
△躍草　四ノ二十ウ
△白丁花　四ノ二十ウ
○風蘭州　四ノ二十ウ
○梅蕙州　四ノ二十ウ
○王不留行　四ノ二十ウ
△羊蹄花　四ノ二十ウ
○車前中花　四ノ二十ウ
△文字草州　四ノ二十ウ
△昊光中花　四ノ二十ウ
△山苣花　四ノ二十ウ
△風車花　四ノ二十ウ
△繡毬花　四ノ二十ウ

△岩梨　廿四丁
△石藤　廿四丁
△室鐸花　廿四丁
△鴨足草花　廿四丁
△夏枯草　廿四丁
△茨花　廿四丁
△千日紅　廿五丁
△青木花　廿五丁
△要花　廿五丁
△盧陀草　廿五丁
△新樹　廿五丁
△若葉　廿五丁
△木草茂　廿五丁
△木下闇　廿六丁
△葉桜　廿六丁
△若楓　廿六丁
△桐若葉　廿六丁
△常盤木落葉　廿六丁
△新茶　古茶　廿八丁
△刀豆花　廿六丁
△葵巾　二葉巾　葵巾　廿八丁
△紫蘭花　廿七丁
△茶挽巾　廿七丁
△玉巻葛　廿七丁
△玉巻芭蕉　廿七丁
△蓮浮葉　廿七丁
○根都古巾　廿八丁
△豬殃々　葬の花　廿八丁
△梅葉　廿八丁
△麥秋　廿八丁
△麦秋風　廿八丁
△青麦　廿八丁
△麦刈　廿八丁
△麦菜笛　廿八丁
△蓮のとゝ　廿九丁
△竹の子　廿九丁
△篠筍　廿九丁
△桜実　廿九丁
△綿蒔　廿九丁
△美人艸　廿九丁

生類

此部ハ四月一ヶ月のいきものとあり

△郭公　子規　不如帰　さゝの田長　勧農鳥　時鳥　卅丁
△待郭公　卅三丁
△初聞郭公　卅三丁
△郭公一声　卅三丁
△夜郭公　卅三丁
△雨中郭公　卅四丁
△名所郭公　卅四丁
△諫鼓鳥　布穀　鳩鳩寺　卅五丁
△鼓原雀　卅五丁
△老鶯　乳鶯　卅五丁
△鶯付子　卅五丁
△鷹鳥塒入　卅五丁
△飛蛾　卅五丁

国立公文書館
National Archives of Japan

△蝙蝠 四ノ廿二丁
△蚯蚓出 四ノ廿六丁
△蚓の子 四ノ廿七丁
△蚕蛾 四ノ廿七丁
△枝蛙 四ノ廿七丁
△鹿袋角 四ノ廿七丁
△蟬の子 四ノ廿七丁
△初鰹 四ノ廿七丁
△生節 四ノ廿七丁
△鰹つり 四ノ廿七丁

必用

此部ハ○雨風の占○破軍の向方○日ごとれよ一色○他行の心得○作事の吉凶○料理献立食物のよし悪等其外あるゝあつい日の定まりゝる事ハ口の日令の部にあり此部ハ日のゝぶゝまゝざる四月一ヶ月の事とあるし

四月目録終

月令博物筌夏之部發端

丸き肉ハ書くろハ夏の気の旺とる所なり

礼記月令ニ曰其帝ハ炎帝其神ハ祝融其日丙丁夏盛極火ニ在と陽気ハ極て陽気さかんなる時節なりと注釈下ハ詳なり

夏東來

漢書律歴志ニ曰夏ハ則火王ゝと其精天ニ在温暖の気百木を養ひ生ゝとらつて又冒ハ假なり物假く大にて宜平ゝらゝ

○和語ニ云ハと訓どろハあつきとらゝ轉音の下略なりなまあと音通どろ也く

○方ハ南とらハ後漢書天文志ニ曰日南陸を行と夏とらゝと見えるり

○夏ハ日月東南の赤道を行くを南陸とゝゝ易統通図ニ出るり

○精を朱雀と南方火を主とんよりて其禽は朱雀とす

○人は禮と云周礼の注疏に曰踐て身ふ行ふと履とす履は礼をうる人の事体を得るをうる礼法身に備へ見事にかざりてあやをなすとす○天を昊天と爾雅に曰夏を昊天と孔安國の云元気廣大をいう陽気をうんにして草木生ずるを体をうる○卦は離と云人を取て和順をうるを離と附と訓ど別きくをうる卦より又は心を生ず親に寄る心

○気は陽と管子に曰其時を夏と云其気を陽とす図の上に詳をうる○臟は心と人身の心乃臟も陽を主て火に属し

夏に配當も故に火藏と云○色は赤と説文に曰南方の色を易號に大赤に其盛なるを陽乃色をうるとす○味は苦と書洪範に炎上苦を作とうる苦味火に属をうる

夏異名

○朱明　○朱夏　○炎夏　○炎節　○光明　○長嶺　○昊天　○南陸　○炎帝　○祝融　○仲呂　○丙丁　○執衡　○南訛　○暑節　○正陽　○假宣　○長養　○氣陽　○炎霤　○奇峯　○南爲

和名

○かけろふ　八雲御抄　かぎろひ　同上　○ちやじ　袖中抄さーもぐさの註に夏の一名をうるとす

夏異名註

○朱明とは陽色をうるとす　○朱夏　○炎夏　○炎節　○光明　○長嶺　○昊天　○南陸　○炎帝　○祝融　○仲呂　○丙丁　○執衡　○南訛　○暑節　○正陽　○假宣　○長養　○氣陽　○炎霤　○奇峯　○南爲

物をやーをひ長どーをうる○仲呂とは陽散ーをうる外に陰實して中にあり旅陽功をとゆふ仲呂とす○丙丁とは禮記に其日は丙丁丙は炳をうる萬物皆炳然をうる著見をうる強大をうる○執

徳とハ南方の神炎帝離ふ乗り
徳を執〻夏と訓るなり南
訓とハ訓化なり南方陽氣に
むうひ〻万物生〻〻〻そだつ〻
○正陽〻ハ陽氣かしこ時節と
いふ事なり○假宜〻ハ假大と又
におなじ物長大ふのびそだつ〻○長
養〻ハ万物生長する月なると云
○氣陽〻ハ陽氣此月ハ充満する
なり○炎靄〻ハ陽氣ふかくて
きめるなり○奇峯〻ハ夏の山
に雲の出るハなり又夏の雲のけ
しき山の形ハ似るゆへハ○南為
〻ハ南方の陽氣とゆ〻物のそだつ
い事〻○炎帝○祝融○昊天い
ずれも註ハ夏の由来の所ふ見べし

夏の朝〻　和蔵抄ニ

ちやなつ
うちるハの天のむ〻雲
〻ひ〻けてあての面おさの初るなる

○右の外三夏ふわる物ハ別ふ部有

四月之部

△此印あるハ能
偕の季と拾ひの〻

此月純陽の月
ある時ハ精氣と
保養して
殺泄とべ

卦の乾為天
〻ハ乾陽
のつ〻ハ卦〻故ふ
天ふ位する〻ハ〻〻の卦〻

異名

△首夏△孟夏△初夏○新夏
△早夏△立夏○〻月△余月
○槐夏○清和　△麥秋○六陽
○純陽○正陽〻月△仲呂△夘月
△鶪鳥羽の月△花殘月△夏初月
○これ〻〻月△うのそる月

異名註

△首夏△孟夏△初夏○い
ずれもけ〻の夏と云夏〻
○新夏いあ〻ら〻き夏と云〻○早
夏いそ〻ハ夏と〻〻○立夏ハ四月の

節の名とゝろ。之月い月ゆ之ゝきとゝ意ゝ。余月い陽ある月と
い之ゝ。槐夏いろんゝ也花さく故ゝ
ゑづく。清和い陽ゝ
△麥秋いむぎ刈月ゆく。六陽ゝ至
と陽ゝて四月と六陽とする。純
陽い純い專ゝ陽さかんゝと云。正
陽之月正ゝ陽の至極ある月と
ゝ意ゝ。仲呂仲ハ中之呂い助ゝ
陽散ゝ外ゝあり陰中ゝ在て成陽の
功と助ゝ。卯月卯の花月と書ゝ
御藏玉　ゑとういの月
夏の花ゑゝかまろれくゝ山の
かまやまゝんゑとういの月
莫傳　うれゑ月
夏屋のかゝるにぢれまゝみゝ
うの花月とゆをいゝゑゝ
△　ゑ初月
消る夢ゝいまゝまゝて有ゝ月
夢ゆのゝ山れかゝこのいゝろふ

節。七十二候。艸木七十二候の月出入。晝夜長短委ゝ左ゝ考す

夏の節

立夏

蚯蚓出　蚯蚓ハ蚯ゝ此月地ゝ六陽生ゝて陽氣上ゝ升て陰氣下ゝ
さゞす蛙い陰虫ゝれば鳴ゝ。蚯
蚓い秋ゝゝれゝ夜ゝゝく陰虫ゝ
陽を迎へて地上ゝ出る燕乃
来ゝゝ。王瓜いきゝゝ
○牡丹。芍藥。嬰粟。此分ゝゝ
花さく頃ゝれい此月の候ゝす

節の日　天氣占候　今日日輪ふ

暈あるとハ洪水あり晴るとハ旱り
○雨降るとハ五穀ふとる○今夜
月これ參星東にあるとハ山田半
収南にあるとハ旱り北にあれば大風
人病む○雲の大さ車或ひハ笠
ばかりく見ゆるあるとき時ハ大なる
陽水の氣ありて暑ふ至て水ふ渇
とべし○東風あれば疫病の難ア

節朝雲の行方角を以て年中の風雨豊凶をしるべし
○風の定まりなきハ凶なり定りて一方へ吹風ハ吉

南午　旱

中

○七十二候○卯木七十二候○昼夜長短○日出入等暦に左記と

四月節ヨリ十六日目と小滿と云萬物次第に長して滿るの義なり

中　小滿

苦菜ハ茶の事こ此頃茶をつみ取こ○靡草ハ夏の類冬水より生ず草の惣名こ夏の火氣ありてかれ〳〵ぞ○秋ハ稲豆その外物の收る時なれば麥の此月かり納るを秋といへぞ
○木香上外○杜鵑啼○茶酴香夢此皆小滿の頃なれ或ハ啼く

天氣　小滿の日と麥生日とハ晴天なるとハ麥大ふ熟と

日令　四月日の定りなる事支の定りなる事とをなす

朔日

天氣

今日朝日の出る所東に雲多く西晴なるハ月中天氣ハ日ハ暈あるべ今月中雨多し○大風吹けバ米價貴し○西北の風吹バ飢饉とする○凡大風雨するバ秋大水あり小雨風するバ秋の水ゆくゆく晴るハ旱り○今日雨ふるバ豊年二日小雨ふるバ水多し三日の雨ハ旱り

更衣

△裕△綿抜△如の花衣△あつ衣△撮衣△白襲又白重ゆく日ゆく日○更衣の時の服襲裏表共ハ白し綾或ハ平絹白ゆくゆく禁中の御裝束今日より改る○御帳のかたびらとじふすり胡粉ぬて繪とかくふすり○着服をかゆる故更衣といふ今日より綿入とかへてあわせをきるべし

女衣服

衣裳の色ハ定ハ八月中頃迄下帶ハいわハ前りそひとびさげたるハ○昔ハ民家にて今日より足袋をはくべしとすり禁中院方の女房ハ四季とりかへる

（詞）新古今　前大僧正慈圓

ちりそめし花の盛りに立ちまさる衣ハ春の夫木　俊成

衣ハ春ハ衣ハ春ハ衣ハ春ハ

連 [illegible] 夏衣 宗祇

俳 いて [illegible] 蟬衣 芭蕉

大酒 [illegible] 其角

初袷 [illegible] 竹

[illegible] 立圃

[illegible] 十摩

[illegible] 西鶴

一日 [illegible] 思貫

衣 [illegible] 之道

狂 [illegible] 入安

[illegible] 入

[illegible] 嵐雪

[illegible] 虛白

青簾

[illegible] 青葉簾 [illegible] 今日より殿 [illegible] 新 [illegible] 御簾 [illegible]

[illegible] 土御門院

[illegible]

俳 [illegible] 嵐雪

[illegible]

主水司始供氷

[illegible] 四月朔日 九月晦日

天子へ氷を奉る [illegible] 延喜式 [illegible]

孟夏旬

夏季の改る始ふ臣下の政を聞しめして御酒とたび扇を頒ち給ふゆへ扇拜も云今は絶 公事根元 [illegible]

云 年中行事寄合 殿中將

法人の [illegible] 神ふかし [illegible] 扇の風もの [illegible]

風爐の茶

三月晦炉を [illegible] 朔日より風炉かける

京

貴船 神事 近江 筑摩祭 鍋祭

[illegible] 云此里の女嫁入 [illegible] 鍋 [illegible] 神事 [illegible] 出再び [illegible] 入 [illegible] 二枚 [illegible] 幾度 [illegible] 男 [illegible] 数程鍋 [illegible] 奈 [illegible] 式ハ初午の日 [illegible]

俳 [illegible] 祭 山崎の近所

二日

京

調子村祭 山崎の近所

圓明寺小倉大明神祭 能 [illegible]

三日　天氣　今日天氣晴まゝ夏中風雨順ゝ五穀豊年也さまにより米と商ふ輩四ゝ三と唱ふ

禁忌　此日一切の血を見るゝ公いむ

京　△山崎日使山崎離宮の社人行列て八幡へ參る俗さ長者形とゝ○宇治黄檗開山隱元禪師忌

近江　山王榊御出　夜半頃大津四の宮へ御出是山王のおくびゝ祭の日神幸のさゝ大津より大宮の拜殿ふかへ入ゝ奉る

上晦日

京　△稲荷祭　此月ゝ三ゝ五ハ中の午ゝ日ゝ　弘法大師東寺造營の時稲と荷ひ来る公ふ現ゝ多ゝ神ゝ初午の所ゝ委ゝ今ゝ多ゝ　是稲荷山ふ鎮座の時大師其ハ面容と自らさゝみ給ひて神事の最初ふ祭さゝ多ゝ神輿ふかゝる面ゝとゝ

大和　△大神祭　大神とハ三輪の神ゝ大物主の神の御ゝゝ　宗信法眼

年中行事

我君の代やさゝん行ふ公ふ　おほゝの神のまゝ多ゝ世は

△住吉卯の祭

大坂　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ　△ハ

上卯

是ハ毎年の卯の日

詣多ゝ年ゝの午の日と記

上辰日

京　△八瀬祭　辰三ツあれば中の辰日行ゝ多ゝ

上巳日

京　△山科祭○北山茂登岐明神祭△久世祭三ツ巳あれハ中の巳と行ゝ

近江　△多賀祭△堅田祭○三井寺早尾祭

上午日

京　○北山イカダチ明神祭

上中日　京　△平野祭　貞観年中　(三の)年中行事寄合　二位中將

拂るゝ月まゆゝしき人の
面影のなつかしやなつかしや

大和　△當麻祭　河内　△森祭　近江　和尔祭

上酉日　京　△松尾祭　貞観年中　(三の)年中行事寄合　貞世

ゆく末さゝん松の尾山のあの姿
いく代ふるとてそまあのゝん

△梅宮祭　橘氏の祖神なり　(三の)年中行事寄合　秀長

神あるゝ月の拂とうそくて
梅の実なれ名つる山邊

河内　△福寺祭　上亥日　近江　△大津祭

四日　不成就日　天氣　今日雨降ハ五穀貴し　南都　△水屋能。四日五日あり　地人能と　大坂　天王寺講堂の結夏音楽

大和　△廣瀬祭　△竜田祭　右両社同日ニ祭りあり大忌風神の祭と云
天武四年ニ風神とタツタタツヽに祭り大忌
神と廿日野にまつるとゝ日本紀に出ぬ
風水の難とのぞく豊年といのる神へ

五日　京　神足祭　六日　江戸　目黒祐天寺千部修行十五日と

七日　擬階奏　是ハ二月ニ列見として六位以下の藝能ある者を撰て式部兵部の二省ようひきいそまいる公上卿弁達を札に記し置き今日持てまいるを大臣うけ取て奏聞せるとゝ

大坂　住吉ノ掌會　八日　今日弦ゐおま祭　とゝひ出るゝ

天氣　未の刻大風と雷昼雨ゝれば豊年ゝ夜の雨ハ宜しからず

禁忌　遠行旅立もるハ悪し　○草木を切打とゝいむ

灌佛　△佛生會　△浴佛　△佛の鉢　△龍花會　唐ハ寺にて五香水と以て佛ニゆゝくす

△花厳堂△五香水△つじ仏△奉ル
○五寸六歩の釈迦の像を造り金乃鉢の内へ金幾僧法を修す是世尊生まるゝ時天竜産湯を奉一象こ

(ゑ)年中行司 咲地 四月の久とかゝ人きいをろ久しき法のをるゝこと

(雨)麦飯を毋さたをて伊せ云其角

せつゝんの虫のやう丸法 左の哥せつゝんの社へさしまゝるべし

(ゑ)とゝこれ四月八日に右日よ
かゝさけむ一のせいそのところ

京 △山崎天王祭○大原 住吉
證據わゝゞ堂参詣 大坂
大常會○天王寺講堂佛生會午刻 音楽
○同所太子堂結夏開闕午下刻

山城 比叡山△花擽 ○戒壇堂
開帳○水無瀬祭○かいで
光立寺 開帳 南都 興福寺佛生會
伶人舞楽○音楽会○天伶人はゝ長しゝ

大峯山上 今日より始て上り戸開
とゝ九月八日まゝ

役行者この山の岩窟ゑ金剛胎
藏の法と修ゝ千百余年ゑゝる

九日 京 清水寺 △地主祭 十二日 不成就日 天氣 晴天い世豊ゝ

十四日 天氣 晴天い豊年ゝり 諺云
今日黄昏時分と見よ
日月對ゝてゝせい秋旱ゝり
東南風い豊年ゝり

伊勢 △神衣祭 麻積連麻ゝて
神明ゝ奉ゝをいゝゝり

大和 △練供養中将姫の忌當麻寺
ゑて行ゝ真言浄土兼学のまゝ

十五日 夏入 佛家ゑて一夏九旬と云
て今日より七月十五日迄
禁足をゝと夏ゑゝりゝといゝ夏
い地ゝ草繁茂ゝ虫多く出来
ゝと踏殺さゞゝゝゝゝゝ是と安居
と云ゝゝゝ夏十九丁ゝ出ゝゝ

京 五山新佛一山の衆徒と集め
祖師佛子と取て高座ゝ登ゝ

偶をこの諸禰師に問尋せられ○東山新熊野大般若轉讀修行

江戸 小松川善導寺中將姫の筆阿弥陀の像開帳

大坂 天王寺塔會午の刻に行ふ昔い天王寺七村より鉾を出祭り申し其時の行列に馬具面人形をば村を社内おさめ有とく

天氣 雨ふれば豊年○暮時日月を見ふ相對して照らせば秋晴多し○月のること早くして雲は紅色をなれば大ひでり多し又月のぐるこれそくして白きい雨とつるさぐる

十六日 **京** 安珍寺鬼子母神祭 三井と同じく今日修行を

江戸 杉妻稲荷祭礼 **近江** 三井寺千團子祭願ある者はんごと千こらへ鬼子母神へまゐりまるを参詣まゐりひくるまゐり千こんごとい

中子日 **京** △吉田祭

中辰日 **京** △向日明神祭

中卯日 △近江八幡祭蒲生郡八幡村在後世三至り移日杉山祭神石清水同

中午日 **京** 下賀茂△御蔭祭 **大坂** 玉造稲荷御出

近江 △菅宮祭祭神三社へ

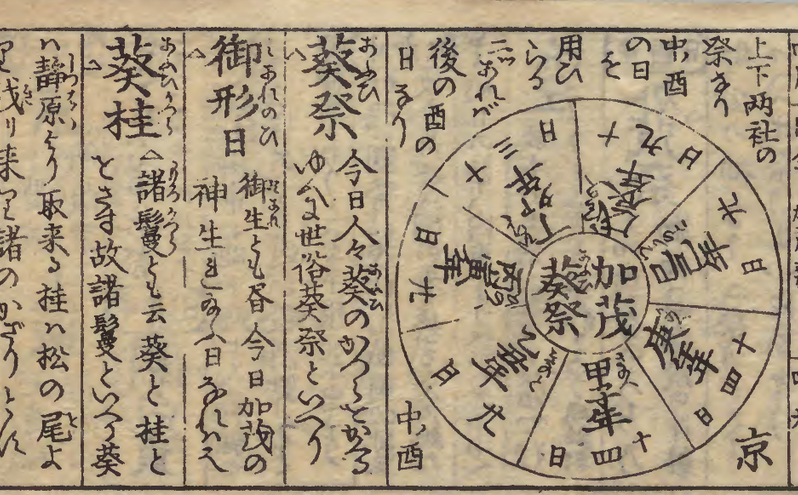
中申日 **關白賀茂詣** 御車と地下殿上人前驅とあづま遊び駿河舞などの神事あるとと公事根元ハ出さる

中申日 加茂△國祭。加茂社ハ山城国の地主故今此祭ハ国の者ハ祭るべ今ハ絶たり四日の祭ハ内裏より祭らせ玉ふ

近江 坂本山王祭 (能) さで沼やむうるぐるの紅葉ハ風鈴軒

中酉日 **加茂祭** 上加茂ふみへうち乃御神○下加茂の神躰御祖の神なり△祭りとそういへべ此祭りなかるふそう

上下両社の祭あり　中酉の日を用ひらる　二あれば後の酉の日あり



葵祭　今日人々葵のかつらをかざるゆゑ世俗葵祭といふ

御形日　御生とも書　今日加茂の神生まれ給ふ日なりと云へり

葵桂　諸鬘とも云　葵と桂とさす故諸鬘といふ　葵は駿河の国より取来る　桂は松の尾より伐り来る　諸のかざりとす

菅笠檐　大きなる菅笠とさし荷ひて行列あり

(今)夫木　ちはやぶる神の御代よりかけつる葵なれやかつ加茂の川瀬　後京極

(今)年中行事哥合　頓阿

神山のあふひを垂てたがゆゑにのこるさくらとかざしてをりけん

夫木　西行

ちはやぶる神の御代よりかけつる葵なれやかつ加茂の川瀬

(詞)神代紀に曰ふ葵草　みあまつ山　洛北の川の名　ふりとれ社を中すらん　丹波の矢代の矢代　ふりとれ社を中すらん　丹波の名をとりて神の名付きたりしと　あふひかづら　葵車　物見　蓋　毛代　かづらあり

(連)かづらてらす　母くの葵の二葉　宗牧　秋芝を中つ木の下に祭りて　去路

(狂)かづらまくもかしこき神の祭りとよみ出し葵とうたふなりけり　常纂

中戌日　京　土焼祭

中亥日　京　嵯峨祭　是則愛

宕権現の祭祀あり　祭る神二座　伊弉並尊一座　火産

霊尊一座と云云むかしハ平安城鷹峯東ゑ社あり〻と光仁天皇御宇天應元年釈の慶俊今の霊地ゑうつし奉ふゑり神輿ハ山下清涼寺より出つ土人の女屋墓ホて舞い或ハ傘鉾を出し風流ゑ

△中山祭　中の酉の日　冷泉院にたゝする石神これあり天喜元年四月ゑうゑ〻光ゑ官幣と奉らるゝ云云是中酉日あるべし

十七日　太和　東大寺撰城使

東照宮御祭　日光山その外

諸国ホあり○紀州若山御祭殊ホ美麗△和歌祭云△雑賀祭云△

廿日　天氣　東南の風を真風とす○南風ハ旱り西北風ハ洪水東北風ハ水西南風ハ平ゑり

京　泉涌寺雲林院如法経會　廿九日まで

廿一日　高野花供　紀州高野山ゑ弘法大師の像の御衣ゑうゑ是を花供ゑうホ今日高野金堂ゑ〻學侶の僧藥師會ゑ修行〻花を供ゑるの日と大師の御衣をかゆる日と同日ゑる也と

廿四日　伯耆大山祭

廿八日　天休節○不成就日

晦日　夏駒牽　○小の月ゑしハ廿八日ホ行ゑる

天皇武德殿ゑ出御ゑり庭上ホ御馬をひき渡ゑ白馬の節會のゑ〻此ハ来月騎射の馬射人ゑ〻ゑ〻御覧ゑ〻ゑ〻ゑ〻負観の頃ゑうは〻ゑらる猶延喜式ホくハし

○北野御神事　青柏御供を〻くゑ

○新日吉祭　皆ハ今日迄世ハ五月

月令

此部ハ月の定まり数四月一ヶ月の事をもまる

神祭 此月神事多し名をさぐべ季にあるを

齊刺 神祭せんとて松竹榊をもぐ事あり

(三) 金葉

かつる春の月のそふにこそ
ちぐさあれの花ともあり

榊取 △榊さし 是さる祭乃
ぬさ也 江次第に委し

(四) 神仏ともふ物に榊を宗祇

三枝祭 卒川祭をいふとも
三枝の花と酒樽ハ
ぞる故にこの神祇令ハ夏の祭の
所ハ載らず (三) 年中行事書 貞大納言
あの花三枝の花とも申や
神乃はまへは酒を多く
茶語 宇治よて今月挽茶壺
へ詰るあり上品を鷹の
爪と云銘い極上と紀を拾匁袋
ハて壺へ詰そこい極そこを中そ
を中そこ少し次ある茶うそつあ封
もるこ又其次ある茶い上を初むり中と
中むしと下と後むりと銘を是い廿匁
袋ハてつもるをべて濃茶に用るこふ
ちつもる次ある茶い薄茶を用るこ
今月諸方へ出をしこ茶事い風炉
の時節より炉と重ぞるにうて
此茶の口切いをべて方にても
九月より後ハをるあり
○弘仁六年江州志賀にて崇福
寺永忠僧都茶を煎して奉る
やあれとも其時い日本ハ茶を
皆唐茶あり建仁寺の栄西
和尚宋ハ入て茶のこを得た
を明恵上人にて栂尾ハ栽
ようあ茶く日本ハひろまり
こうそれよりして栂尾と茶山
とい栽所と深瀬と云て今あり

煮酒 京師是を酒煮と云て酒肆あるひとゝ
ずゝひまゝに飲しむ是を酒煮の祝ひといふなり

矢數 △大矢數とも云 洛東
三十三間堂にて此事
とゝめん弓の天下ととるか矢
を通をゝくむ一ようの四月
中旬か極まれり日のあた
りつてのゆへなるべし

松前渡 商人蝦夷松前か渡
る冬春ハ寒氣強く
渡ること故此頃渡り秋上る

(俳) 麦はんて私の日考や印の歌等水

時令

此部ハ四月の時
候をかゝる事をあつむ

首夏 四月の異名あれども
それハ只夏の初と云意へ

(歌) 新古今 素性法師

いとゝぬきてる夜ごろもうる
建保百首 定家
大井川うゝめの世をのまとゝ
なるこゑくゝと夜あけぬるか
新續古 首夏風 左大臣
吹風も程やいとゝ花の香の
うゝをたゝりくゝ初くまゝ

(詞) ちる花。夏の雪。氷はなれし。淡
みどり。あを柳。こひろの林。
きのふはさくら。初る花。まを柳。
若葉。卯月の始め。林とは。
春の俤。夏の木。

(俳) 竿てゝるも卯月の涼うる愚貫
むくゝあを柳のひろはけ移行

(狂) 去三月いつのまにか中〻吳竹の
葉数とりかゝ夏いとゝくり 宗谷

(詩) 首夏五字對句

清和未換衣 風光夏葉初
セイワイヽダカヘコロモヲ カゼハヒカルカヨウノハジメ
ノドカニシテアツカラズ ハトクヲフシテアリ

幽僻還聞鳥　花落春鶯晩

詩　首夏七字對句　詩礎

西灣水綠堪銷旧　列樹雲
南浦花紅好送春　艸綠春

詩　首夏之詞　明　郭享貞

巡簷燕子掠晴絲　隔水茶烟
出院遲燕メノ片々ト飛ブハ晴天ノ糸遊ニマガフ川ムカヒノ茶ヲ煮ハ烟ハ風ナキユヘ艸色入簾
オック立ノボル十リ
人不到午風吹暖夢回時　青草
盛リニハエレゲリ人ノ来ラサル処ホド繁ル午夢サメル折フシ風ノ臭ナリトソ

和清天　梅天。ゆきも四月の時候をいう。樂天の詩に孟夏清和天云閑之名く

○源氏胡蝶ニ云清しいう

夫木　小大進

雲とれて月もみ波る夜の花いかりゝ〜ざうゝ水をうつそ

卯花朽　頃日の雨でいう卯の花をくちしをる

ふり哥に三月ふも五月にをくちゝり連俳に四月ふり

山里の外の花々を折柴垣をゝる山川のみ　後京極

新暖　四月の頃は日々ふわてふ故新しき暖くいう

短夜　○お能に夏処育　古来長日と春ゝ〜短夜と夏〜長夜て秋〜短日て冬〜四季に多ち用ると能階の差略を

長日　唐の文宗帝の作りあひ

詩　人皆苦炎熱我愛夏日長と殊に頃日未熱て愛とくさ日く季に春ふり

時衣　若楓衣　千草色　卯花衣

麥衣　麥ハ四月一ヶ月乃
麥ハ四月一ヶ月乃
麥ハ四月一ヶ月乃

草木

麥ハ四月一ヶ月乃
麥ハ四月一ヶ月乃
麥ハ四月一ヶ月乃

餘花　△青葉花　殘花。春ハ
おくれて咲のこる花く

(三)　新拾遺　内大臣

別てのほ世べくやゆく春の
日数よ花のこれ殘るくん

家集　山餘花　雅有

ちられてる玄武さ山ひげ乃
ち葉ハ〳〵ひ〳〵ちのひ〳〵本

續古今　殘花　俊頼

樓ハ〳〵ふ岩ぶ〳〵いひ〳〵ろと
花ハそ〳〵ぞ去い世〳〵き

(詞)　枝ハすくるさ。ハ〳〵木ぐく生。
ハ〳〵ハ〳〵ぐる。去れ形ハ。風の強。
岩強。去ハ強。ぴ〳〵ぐ。ハ入る山

桐花。白桐。黄桐。紫桐。樹
桐。是皆桐の種類く

梧桐　桐ハ似て皮青く疎皮ハ
日月の関を知るべ〳〵都く
十二葉あり下よりかぞへて十二葉
の中に小葉あるハ其月閏也鳳凰
乃栖ハ此桐なり

(三)　寂蓮法師

百敷や桐の梢ハ青むるの
ふ〳〵せハ外の色もかハらじ

(俳)　移ハ小も咲て見せる梧桐ハ来年
厨造り葉ハてゆし桐の花　其角

檀花。杜仲。思仙。木綿ハ
(三)　顕輔

若のひす岩ハ花まあ色ハ
見を嵐ハ去ハ世ども乃

枳花　時珍曰葉ハ橙のごく木
橘のごく白花をひらく

(詩)　枳穀之詞　雍陶

澧水橋西小路斜　ホソイヨコ道
川ツタヒニ
日高猶未到君家　オタクヘ行ツ
ヒタカク　ナホイニダ　キミガイエニ　オタクヘ　ユクヘハツスギ

村園門巷多相似　ザイヨノ同シヤウナイヘナリ

處々春風拗殼花　キコクノサイ久舞カゼアタヘカイ

蜜柑花　大和本草ニ其花ヲハナタチバナトヨブ

柑子花　○花柑子ヨモ云　夫木

ヒ程ハいせ物語ニ人ヲ

伝て涙ノ袖ニ花柑子ヲ　慈円

乳柑花　○久年母ノ花　正月

橙ヨ似ル

橙花

柚花　樹葉皆橙ヨ似ル　ヨウ花甚香バシ

金柑花　白花

雲州橘花　白

佛手柑花　実熟シテ人ノ手ヨ似ル故名ヅク

橘

包橘　盧橘　軒生草　昔州　庭古州

ヒヨ花○橘ハ柑類ノ惣名也

だいくさうんの類をべてさうびる

なり世よたちばなと称する物ハ

包橘ヨリ　万葉　三方沙弥

橘のにほへる香かもほとゝぎす

ものをそ思ふいもにあはなくに

新古今　通真

彩雲花飛来ヒ夕風ヨリ

散ヨリ来ル富ノ家花

同　家隆朝臣

今をさかりの花咲そひろ立のいそ若の若ふ白ふ

家集　風静盧橘香　清輔

君ヶ代ヨ枝もるゝさて吹風ハ

ちるを立の白ふ

夫木　閑居橘　光俊

たちるをいけのかゝれるはなの

のうへ中ふうてそ白ふ

同　夜盧橘　如願法師

ふる花ヨ人ハ見ぬ夜の

をゝろ白ふ

同　里盧橘　隆祐

ちるを中ふ白ふ

ちるをみちのくの

ちのぶ人ハ白ふ

詞　旬は咲ちるさくらの月　神社の寄ふむ〜と歩く〜ひ〜　橘

とものの名目は樹名　ゆくさ寄い橘　ようよう〜もえる寄を　ゆて　星　橘の花を実　ゆるも　人面　実ゆて十二月

花ちるよ五月　こがねの花　橘の実をこがねの　橘くぬる　古里。郭公。五月雨

連　橘はいく〜ろうば〜あの風　宗祇

さつの花ふまゝ〜ゆ旬はさつきの特花

俳　首旬は花さく実さく体皮さく　其角

雨ぞ寄ゆて橘のさゝやもぞ　尾貫

狂　陳皮は八重〜ぬぎより立ぬの旬いそさくぞ乳ぬ茉莉　自穂

詩　橘五字對句

楓樹隱茅屋　白花如霰雪

橘林繫漁舟　朱實似懸金

詩　仝七字對句

詩礎

銀章自謂人臣力　歲寒心

玉液誰知造化功　度玉岑

珠顆形容隨日長　處々紅

瓊漿氣味得天成　嘯橘林

厚朴花　葉瓣の葉に似て鋸歯に大なる物尽に及

花女郎花に似て大なる　秋

実紅く熟して千年蓋の実のごと

素椒花。山椒もかく味ゆる

つく物く多く干て食へ

櫻櫚花　花の初魚の孕子

のごと〜是と櫻魚或

い櫻筍と〜漸く長して花

穂となる淡黄色なり

詩　夫木　為家

胡まごゝ指ぐゝ花たゝ

とゝの系ゆゝ日ゆ櫻櫚の花度江

俳　掃ゆゝ日ゆ櫻櫚の花度江

梭招の皮一年に二三度あるひは四度剥べし剥ざれば木くさる長ぜざる也皮を剥ぐ葉なる所より剥初る葉の付る所中にあれば幕かゝる時あし

柿花　正字柹

○柹ハ七ツの妙あり一に多寿二に多陰三に鳥の巣なり四に虫くいなど五に霜葉玩ビ六に実なる七に落葉なるはて文字を唱べし右を柹の七絶と云

榎花　飛　生ずるの花も中に異さ外面齊

(多)夫木　門徒の墓の榎はなをもとめこそ為家

(多)人の家ぬいなり

槐花　今月花咲　実は秋く

卯の花　搗の花

異名　白荊花。錦帶花。空疏。楊櫨花。ちはの草。雪見草。初見草。夏雪草。垣見草。卯の花とつくはつぎぐるの中略なり箱根うつき十妹妹。花いろ〳〵　〇岩本うつぎ〇里うれぐさ　〇三葉うつき

(多)新古今　白河院

卯の花のひかりにまがふ垣根をば雪ぞ降れる月の影かと

太宰大貳重家

卯の花咲ける垣根白妙の波立てゆる垣ぞ見る

後京極摂政

夫木　里人のうのはなかこと山ぶかみ月と雪とのひかりとぞ見る

家集　水辺卯花　西行

玉川のうの花まがふ白波を見るとも思はぬ人のみぞ見る

家集　卯花似夕顔　匡房

なにはえにはうのはなとゆふ顔の垣ゆふまがきくさかるるかな

夫木　卯花似月　為家

久かたの月かとぞ見ゆるかゝりのさとにさけるうの花

嘉禄百首　河卯花　為家

久方の空の雲の卯花を
月かと見ぬかの夕暮のそら

五社百首　暮見卯花　俊成

さゝぬ日のうるゝ山ふの庭風に
消ぬとまがふ卯の花

夫木　湊卯花　定家

かるこのゆふいさゝふ浦風に
あらそふ波に卯の花

夫木　舟路卯花　家隆

うれしなに咲やまがふ卯の花の
袖をわたりて見ん

明月　山卯花　敦定

秋ふかみ山たゞけとぞ緑なる
うのはなさけるゆふの山うち

夫木　社卯花　定家

あさぼらけ三輪のとやうの屋
ゆふ山ぶかくかゝるうのはな

鳥羽殿哥合　田家卯花　俊成

小山田のいそのうの花かけてなり
ぬるまの花ぬれぬ

夫木　卯花繞家　寂蓮

卯花のかきもの花のまがひにて
いでぬるゝ人ぞ

金葉　卯花連垣　匡房

いまをさかりとかれてわ
ぶ垣根にまがふ卯の花

千載　遠村卯花　政平

うれしなるのゝ花めぐり山ざくら
かきもとぞうの花

後拾　山家卯花　通宗

絶て来る人もなき山ざくら
我のみとはと咲る卯の花

詞　卯の花　白妙　雪　音信　月　山里の垣ぬ　山ふ　路の月　山陰　雪　ふる　ふる　雨　野　うつき　水　分　川　さ　ぬる　夜　ぬる　井　笑　波　沼　の　ふ　こ　ぬ　の　雲　雨　卯の花の名　卯の花の名　雨　卯の花　卯月の時鳥　卯の花の陰　かく　卯の花　木陰　木の　雪　森

歌の下句は垣ちかづく姫ゆり
の姫ゆり卯の花姫うゐき姫

連　ちらさじとうれしむものさくら哉　宗砌
卯のはなかをてをる姫やれ　宗春

俳　卯の花やつまのはかの花橘　其角
卯の花に隠も鹿つれらゐき　井蛙
雪月花一度にくる卯の花　貞徳

狂　卯の花はかのおもかげある白雪と
きふ不審のもくず　貞徳

數椿（やぶつばき）

五月女負の條に奉し

牡丹（ぼたん）

異名　木芍薬　魏花　鞋紅　姚紅　姚黄　国色　天紅　魏紫　馬紅　裴白　鼠姑　紀羅老紫　葉庭紫　牛家黄　状元紅　二十日草　深見草　名取草　富貴草　鎧草　花王

句　草庵　頓阿
咲ぬ々くりなれそい夜のぬくもり
さ〳〵でもくの花ふるる春雨

玉葉　愛牡丹　師兼

紅なあかそもるる夕もふるる春
雨〳〵ふるるなの色う卯

詞　花のとり火紅白ぬ〳〵ぬ
〳〵ぬ　花ぶさ玉簾ぶさ〳〵
咲　哥よい春之連俳よ夏なり

俳　ふとそ〳〵〳〵むるりや牡丹　宗因
八重とうふ弟八牡丹うゑ其角
牡丹ゆそ〳〵ぬつるもぬい五　移竹
山家よ老てをいぢんゑ専吟

狂　花い様解いらやうよ〳〵つぐ
こちい蜀もの花よ月うつく　柳円

詩　牡丹五字對句

朱嘗貧外見　異香開王合
不似地中生　軽粉泥銀盤

詩　仝七字對句

詩礎

曉艶遠分金掌露　正開時

暮香深若玉堂行　浅復深

群芳盡恬千般態　有此花

幾醉能銷一番紅　醉數杯

(詩)牡丹之詞　唐　李太白

名花傾國両相歓常得君王帶笑看　牡丹ノ名花ト傾国ノ美人ト両ツナガラ君王ノ御気ニ入ル故常ニ君王笑解フフクミテキゲンヨク向フトソ

釈春風無限恨沉香亭北倚闌干　此両品ニムカヘバドノヤウナ怨恨モ忽チニウチワスベシ

(詩)飲酒看牡丹　劉禹錫

今日花前飲甚心醉数杯　苔ヲナカメテ終日酒宴ヲナスナリ

但愁花有語不為老人開　苔モノ云ハレズタトヒ物イヒ語ルヿヤリトモ我等老人ノ為ニハ口ハヒラクヿジキトナリ

牡丹　花中之王

錢思公カ説ニ白花ヲ第一トシ紫花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ木ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

沉香亭　唐ノ明皇ノ牡丹ヲ栽ラレシ御殿也

白牡丹　花潔白ヨーして愛へべし

(狂)仮粧し待ふ仏しき美女れどとく牡丹い白ふ極まる　貞柳

(詩)白牡丹之詞

長安豪富惜春残　争賞新開紫牡丹　都ニモ春ノ名残ヲオシミ牡丹ノ花ノ開クヲワレトテチカ子テ賞翫スルゾ

別有玉盤盛露冷　無人起就月中看　白牡丹ヲ白銀ノ盤ニ見立テ作レリ

白牡丹

種類　三国。五重七重花びら〳〵あつくはなやかなり

○あら〳〵菊。五重大さん○白縮。六七重大さん○出雲。六七重中さん○香久山。三重大さん○釉の雪。大さん二重をこゝうるゝあり

紅牡丹

種類　深井。大さん濃紅うつりあざやかさ多〳〵

○筑前。中さん色濃七八重いろ蠟紙とべをぬりるごとし○あほ風大さん薄紅うつりの紙をくんでるとはくゝなるごとし○朝日山大さん五六重丸咲○見越。濃中さん八重○妙覚寺。大さん四五重○廣沢。大さん四五重○揮々。大さん九重○待夜。中さん重うつり○山里。さん紫菊さん○大紅。大さん黒紅うちはそで九すゝう一尺まで○舌紅。中さん五六重紅色うつり○濱紅。大さん多〳〵○小泉。色中紅さん花さんてさんうをきかうあるあり

芍藥

異名　將離。花相。犂食。餘客。和名ハ名深草。かいよ州。秋根とりて藥用とするあり

俳　芍薬の四よやまさの徘案　立圃
芍薬よ骨折見ゆる竹もる弓　移竹

狂　咲つゝや牡丹と百合の中くよ
なく生ぬ芍薬の花　常樂菴

詩　芍藥五字對句

幸因親切地　孤賞白日暮
還遇豔陽時　暄風動搖頻

詩　芍藥之詞　唐韓愈

浩態狂香昔未逢　紅燈爍々
綠盤龍　昔ヨリカヽル色香ノ風流ヲ見ズ花ハ燈ノキラヽカナル如ク葉ハ青竜ノロタカ〻ル

似タリ　来獨對花情驚恐知
在儒宮第幾重　八十八仙家ニ
モ幾重ス

芍藥名花　○闌半。四三重紅
の中ハ黄うん交り
○小夜雨。四三重隨分白○金孔
雀。四三重ゆく紅○白砂金。白三四
重○たくさ。薄紅二重花中うん
白ー○錦木。四紅三重りうあげ横色金
杜若　燕子花かやよ花かきつ
ばた本邦久ーく誤て来れり
杜若い香草なり此花の正字馬
蘭本名い茄実なり

(家)　建久百首　定家
かりごろもすそ野にまじる杜若
ぬれてもみけてあさるまつさだ

拾玉　杜若写水　慈鎮
杜若うげもかつらをゆるるる
あるといいそなそざ〻まつ

山家百首　水辺杜若　神正

波の上の山下あのかきつばた
ひとえに深き色ぞ咲くらん
○哥の部立ハ花つくと春ハ
ものり連俳ハい夏なり　(詞)沼。
山下あ。橘衣。うす衣。そろく。
名所い。伊賀。八橋。志賀。昆陽。
廣沢。池あ。冊沢。花うゑ
(連)あと出てあるうぢー杜あ宗春
(俳)笠まけ面ハ花ろ杜あ其角
あの月や門ハ花て行かなろつて信徳
まるくと花のなりむ杜あ林鴻
(狂)あてとくハのあやめ花つて
ゆくりで似ろとにな糸ろ雄長老
まあ花とつくとろと竹ろうあ
一そいろうぞかきり
ぞこう邨　信海法印

杜若名花　○鸞尾。ろうん中
うん白ちぢ○羅生
門。うす黒ー○橘姫。ろうけさ
○濡鷺。ぬれさ○薄雲。白き

むらくうそう○小橋濃ひさき花首は葉一枚つゝ出る莖一本ふ三返つゝ咲くものゝ肥るゝ花四五ッつも咲一番花二番花とゝく

知母花　異名　一八の花　青き花穴

紫羅草　鳶尾　和名は余羅草と書て花紫ゆて杜若に似ゝ

覆盆子　種類○蛇母○蓬藥○薦○樹母　草いちご

ゝちゝゝいちご　はるいちご　べゝいちご　ゝきいちゝゝべて夏花さゝる

王孫花　異名　長孫　○海孫　**芥子花**

一名　米裏花○蜜粟花○象穀○御米　俳　けーしゝる

ちるあとの須弥いくゝ其角

一名　いろ〻ゝゝあとけーゝ花立圓

ゝーゝ多ゝゝ合ゝけー坊主宗旦

荷行ゝゝるゝつまけーゝ花訓子

阿片○鴉片○阿英蓉○阿片

ハけーの花の津液を

ゝ罌粟青苞ゝむゝぶゝき

午后大ゝ針ゝゝて其外

の青皮ゝゝ裏面の硬皮ゝ損す

ゝるゝゝゝ次の早朝津出るゝ作

ゝゝそゝゝ收て瓷器ゝゝて陰

乾ゝて用ゆ名方一粒金丹は是

を以て製を尤

久浮の妙薬ゝ　**躍花**　續斷　花葉

の生ゝ人笠を

ゝ躍ゝ似ゝ因て名　**白頂花**

異名　滿庭芳　少ーゝ香の氣ゝ故

名づく花白く小さ　擔滴下ゝ植る

風露草花　花白梅のゝし　**梅蕙**　花白

王不留行花○金盞銀臺○花　藤撫子ゝ似ゝ

俗ゝんーゝ　**羊蹄花**○和　大黄

車

前草花 異名 牛遺。牛舌。車輪菜。花穗

文字摺 ○紋摺草ともかく本名いまだつまびらかなし

靈光草花 ○鷹爪。花黄ゝ器緑豆ゝ似う実同

山菅花 白き小花 風車花 白花淡ゝ紫を帯ム

繡毬花 白花集咲てあやめ

岩梨 二月ふ後

石藤 ○青つら。つら茎。花葉も紫藤ゝ似う紫白の二種あり

夏枯草 葉すこしの如く花紫あり

宝鐸花 花鈴釵のゝ倒ゝ垂る青白色あり

鴨足草 異名 鏡面草。虎耳草。花淡紅色

茨花 ○薔薇 ○牛棘。山棘 ○牛勒。実を營実と

名つく野生い紅白二種あり人家ゝ栽るもの花の形色数品あり

哥 六帖 我いけさうゝそりつる花のるゝ花あざやかなるものゝ

千日紅 花の盛り久しく七百日紅ゝ勝る故ゝ名づく

青木花 花紫黯色ゆゑ美ゝ葉常盤ゝ

要花 ○扇骨木。正字未詳ゝ

ゝ小白花をひらく其樹最も堅硬して扇骨とする堪ゝ故ゝ此名あり

蘆陀草 ○著婆三礼草。近世南蛮ゝ来る物ゝ

新樹 樹い植物の總名ゝ新葉の薄翠ゝ

哥 新古今 曾根好忠

花ちる庭の木ゝ間も多く合て天照る月の影ぞまれなる

夫木 定家

みぢかくなるゝのとうゝ月ゆきひて
まとゝうゝ乃えをすくるを

玉葉　庭樹結葉　院

そゝるへて枯みゝゝふるりぬるゝ
松のみゝせもるゝゝざりくり

新續古　山新樹　左大臣

それゝゝふるゝゝせて春をゝさくゝ
花ゝとゝ及の本末をりゝと

詞　さるゝゝ蔭ゝ秋ゝの袁。秋
山の紅葉。若楓。若葉。夏木立。月
りゝぬ庭。ゝのひゝ紅

若葉

新樹と同し　諸木の葉の若やゝゝとゝ

俳　三笠山月ふ金をと若葉ゝ　務行
溺ゝ移ゝと三井の若紫ゝる　松雨

わゝゝ葉

○病葉とゝゝ○若葉の内まれと赤く又ゝ
白くあるひゝ黄ゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝ遠近とゝふ夏ひてゝゝゝゝ云

木草茂

草木の繁茂をゝと　茂草　蔚林をゝゝ

木下闇

○木晩○万葉まゝ木。
ゝゝゝゝゝゝゝ

新茶　新製　古茶　新茶ニ對セ云

刀豆花　色淡紅　俳　熟花ふ　ふまこ豆の花の異羅州

葵　二葉草　葵ろ　日吉祭ハ　折まる　桂と酉の日加茂へ

遣を加茂ふで葵ひろ　をゆるを　ひろう　ろ　ろ　ろ　ろ　日蔭草　日蔭の

ろ　ろ　葵ハ日蔭ハ咲て日ハあ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　○唐

土ハて蕙葵といふ　ものハ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　と山州加

茂の山中ハ生ル二葉の葵ハ

面書く　裏紫色と帯ル　ろ　ろ

上ハ　ろ　ろ　ろ　ろ　桂の木の枝ハつけ

て簾及器ハ　ろ　ろ　ろ　と北山中村

ろ　献ル　○葵の種類五月の　ル　ル

俗　新古今　小侍従

いろ　ろ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ

茶挽草　雀麥　穂のり。燕麥　麥ナラ味ナシ

俳　ひるがほ　ゆうがほ　ゆうがほ　ゆう

刈人もうたゝびとへもはくゝんと
ぬぐゝ　なるぐる麦の敷二

△青麥　俳　青むぎ　ぐるぐる　麦の国　鬼光

△麥刈　立春より百二十日ゝ七刈
と旬より但小麦は十日ゝ遅

△麥藁笛　麥の茎とりて笛
より小児の戯

○西行奥州ゝ下ゝ河一人の童子ゝ逢
ゝ僧ハ何国へ行玉ふと問ゝ西行哥
拂ふ塞ゝそゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝと然ゝ
ゝ比あの方ゝ行ゝ多ゝ必ゝ辱ゝ得玉
ゝ多生夏枯ゝ神ゝ哥ゝ僧ゝ
ゝゝゝゝゝ西行ゝ神ゝ事ゝ頓ゝ弁
ゝ夫ゝ引ゝて洛へ帰ゝ
ゝ所ゝ西行ゝ松ゝ
ゝゝゝ樹今ゝ草ゝ麦
ゝ是塩竈の明神示現ゝ

詩　麥秋五字對句

川光淨麥隴綠樹連村暗
日色明桑枝黃花入麥明　明申時行

詩　麥秋之詞

尤々秀色挺来牟片々黃雲
似水流　麥ノ色トリワケ秀デウ
ルハシホナミノナビクハ雲
ノ水ノ流ノ如クナリ　風作跳波時隱見
雨添新漲乍沉浮　凡雨ノ波ヲナ
シテ浮沉シ見
タリ隱タリ　晴畦錦漾千層穀寒
ナガムルノ
隴濤生四月秋麥秋・豊饒却
怪狂瀾頻起陸漫教文偉賦
中愁起ハガゴトシ

蓮はね　蕊若根・順の和名抄
小蓮の蕊和名はあく
哥ゝどに詠ゝるゝ賤き身と塵灰ゝ
ゝゝ待るゝ賤き身と塵灰ゝ

人の思ふ心多し蓮泥より生ずれば泥と戀とをそへてよそう奥伐抄

和名抄等に泥と云ふ字をこひちと訓をなり

筍　第　異名　竹萌○初筆　竹　夫木　臣衡

親のこえむ山に人いわるると竹のるれしあるいなくし

(用)筆の皆能師名人や東坡画李吟竹はよい春の侯なる育ちる久住者侯の筍とかむ滅り邦　其角

(注)筆を送りて新筍を乞れて所懸付に竹のこ侯を保友

(詩)筍之詞　唐李商隱

嫩籜香苞初出林於陵論

價重如金　タケノコノ出カケニハ價ナハダ貴シ

皇都陸海應無數忍翦凌雲一寸心　都ニモ鄙山ニナカルベシ翦ヲシキモノナリ

採筍法　朝早く見て露の上ちざるものをめさしとるべし　露上るものハ大竹となる

竹根ひろうると止る法　隣より古竹来り嫁とするハ海帯を多く埋めで此方へ生ずること

淡竹筍　四月　盛出　紫竹筍　味ひ淡竹ホ同一

美人帥○虞美人帥も了　(醒)　けるふ巳て花いさ　(絡)　(注)　(業)

唐項王の婦人虞氏自死ス其墓上ホ生ずる帥有人ん美人帥と云と支音集

○右の外説多し　奏して八八北六丁出

(用)ちくせうの風の姿や美人帥　可申

篠筍　篠ハ小竹ありて俗ハ笹と呼ぶ

類多し筍と皆篠子と云

(哥)　拾遺　道昭

今ハ我くるしき老の坂こえて　みるけ口るるもくのかなら

櫻實　生い青く熟して赤黑
妙薬　しく魚の毒とけを

(俳)実桜や　ゑくぼにたるる温故
実桜や　ちそ通ろくいろ　是水

ゑくぼ　ゑくぼ　ひさの綿蒔　匙さ
ひさや　桜の実　俊之　二月　世木の部

種植　豆植　黑豆　大豆　小豆　胡蘆蔔　移栽

石菖蒲　秋牡丹　枇杷　秋海棠
桂　楓　杜　菊　咲月うへ替又ハ鉢植ゑ
水そ　沉丁花　連翹　雁木
芙蓉　木犀　柏　椿等

挿木

収採　蜂蜜　稀薬　紅花　蚕豆
桃仁　桑の実　麥

生類

此部ハ四月一ヶ月の生るいたあるもの

郭公　異名　望帝　子規　杜鵑　杜宇　蜀魂　不如歸　百声鳥

王迎鳥　田歌鳥　早苗鳥　妻戀鳥
田長　ちでの田長　無常鳥　夕影

鳥　蛾背鳥　勧農鳥　くきら　時鳥

(ゑ)貞應百首　遠郭公　為家

雅里にてをやひんかくきす
やのめ花ちくるえたちくる

常盤井百首　朝郭公　仲正

ちくきゑまくもくて夜の色の
はくかふくるきりくるん

夫木　社頭郭公　大宮大政大臣

このとをるはやくるとせくれ
うれ神さひてちくるくすす

夫木　人家時鳥　法印印宗

ゑはまつ去のくの色のかくすす
ゆれむちくめ声くるちくみと

弘長百首　雲間子規　行家

ちくちのうくくこのかくきゑ
そくよいれくくかくるん

夫木　近聞郭公　俊成

あくれもとくくこの色ちくそ
かくくひわくれはやくきくれ

同　野郭公　定家

[illegible]

同　里子規　入道二品のこと
[illegible]

家集　山寺郭公　西行

[illegible]

詞　和声　和声。[illegible]

[illegible]

[illegible]

むしとあそぶ声。人ふるさまをバ
うれをとこと四ノ字人も時。上ノ句

月　やく　きさの月ふるんあり
くもく　まるまるおさびる。

雨　あををてふ
これ雨あの名ぬをあくまむしくさめのより出て
なくこの月あるをちろろうるくわのちのくりよ
おくあと

早苗　一説よやくるなのこの
ようり　ふりくるくりて民と農
をすむひる多うて田時不熟とおくようつて
去での田おさくいとまくこの苗ふりかー
もおくやくるすーでの

鶯　きのうのいこの
田おさくむべもいのくり　やれ新ふく
くるう多のういこのやる　名ぬをいふれる事を
やくくさすはろうーし　名ぬをいふれる事を
ようて多ふ色あり　やくくすおく声をかし
たわーきるくぬーさたるうぬ名ぜくつて
るどくるり新ふのなくれ

春傷　ぬをいふ
ふいのの
ひとうりあるとふ一説あり　去ての山ふ入て
ふうんやくおすふ多ーくくくくるん
懐春　むうーをくくる。むうーをのの
むうーおくるの一多

連　名ハるく春ハ上ふ　やく　春　宗因
ふるふ　ようふ　ふ　山ふ　ふ　郭ふ　全

俳　時ふ　ふ　ふる　ふ　ふて　ふ　郭ふ　秀吉
ふけ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　清正

ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　

△郭公声　是覚つるを心え
㊂白川殿　範忠

はるゝ〻一あのゝるゝ〻ゝあ
をのいづくふ遠ざかりきる

連　一声の月ぬ山ゝ〻かゝ〻ゝ
俳　一あやゝ只見式の山吉伝　伊當

狂　ゆるまいぞ鳴るまいぞとなくなす
今さかく今の一〻多　宗鼎

△夜郭公　月よせてもよりの
㊂続千載　高遠

ゝゝゝまいぞやあ〻郭公
ゝを夜ふくもなさけるゝ

連　誰がゐの卯花月夜保くなす
月なくゝめる夜半のかくなす

俳　焼味噌と炊ぶ庵る夜杜鵑　移竹

詩　夜郭公詞　顧況

野人自愛山中宿況是葛洪丹
青西オクヤニヲレハコソハツ子ヲキイタ
ヤニレテカツコウレヨクソヒ
庭前有箇長松樹夜半子規
来上啼　コノタカイニツガニハニアルユヘニ夜ナカゴロノホトトギスノコエヲキクトナリ

△雨中郭公　多く五月雨とも
あり或い淋しき体
なもよろし

㊂家集　雨中時鳥　顕季

月あかいまさのとうれやくぎ夜
ちゝくにわまそるゝろゝ
狂　あの夜やを井のそこれ郭公
りゝて稀ゝふゝ一あり東陵

△名所郭公　多くあり詞の所を出
㊂夫木　中務卿

あゝ高山ひゝのあゝれやくなす
ちのゝようめ稀をやるくらん
俳　はの玉れ玉の知るぞ郭公思賞
狂　に紀彩とゝ歩て時ゝなくゝ
かゝみの池水新をうゝて英中
○唐士の郭公ハるくゝ多至つて
あるまこいてゝ思きゆへ待て聞を
欲す詩ハ作るも其趣なり

詩　郭公五字對句

杜宇呼名語渚頻行客驚
巴江學字流山木杜鵑愁

詩　同七字對句　詩礎

花外子規燕子月山岫連
水邊精衛浙江潮杜鵑啼
望鄉臺下秦人去顧雲霄
学射山中杜魄哀子規啼

詩　子規啼　韋應物

高林滴露夏夜清南山子規
啼一聲夏蔑ミ露ヒヤ、カナル晴
月ノユフベ子規ノ一コヱ
オトヅ隣家孀婦抱子泣我獨
ルヽヅ

展轉何為情時ニ感ジ物ニ應ジ
レ霜孀ノ小兒ヲ抱キナガラ泣
クガモノカナシク自身ニイフカルモ
ニタアハレトリトナリ

郭公　鷐

不如歸　蜀ノ望帝其臣下
ノ妻ニ淫シテ位
ヲ讓リ亡ヒ去ル時ニ此トリ
啼故ニ蜀人ホトヽギスノ啼
ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴
ヽ不如歸ト云ガゴトシ

諫鼓鳥　布穀　郭公の雌
鵁鶄

俳　つくる板屋の背戸の一里塚越
戸を出て其日ぶらつくる半秋

葭原雀　部蕭。芦又ハ葭原
の中かてゝ〜まくく
ゝくく吉原
雀ともいふ

老鶯　乱鶯。四月ゆい
〜うて其声やゝわ〜〜〜〜
故ゑ老の名あり乱鶯も同一

鶯附子　よれ引音の鶯小子餌の鶯と附て竟と習ふ

鷹塒入　三才圖會曰鷹四月羽毛と易んとする時羣繙とゝれ鳥屋の内ゑ放ち新毛生じて七月中旬舊のごとくなる

（考）鷹三百首　多屋ゑ入る八日やしの日あしぐゝ夜ゑ羽去れ美領くん　定家

○鷹三百首抄ゑ卯月八日小塒ゑ入七月十四日ゑ出とゝゝ　定家の説

飛蟻　蠻　飛蟻　白蟻　俗ゑ

飛蟻　ゝゝゝ

あれくうる家の玉ぞ乱るる

詞　さびよ。蜘の井の元。蜘のうるさい。さびよ。蜘のあゝぐさ。もぐさびふ。紙をる。衣にく引。蜘ゝ。糸さぐりいせ。さうる糸。てゝ糸もゆゝふひくいと。あさる糸。りてふいそぐ。蜘の糸。前形ぞしら糸。ま茅糸にうと風を世ふそぐ。

俳　蜘のゝ糸。奇光うらいて紙湖雲

蛛の巣い暑さ知うう雲ゝ之鬼貫

狂　風ちうく吹きしとても蜘の網

ひくる世界い仕あ文故常楽春

詩　蜘蛛之詞　唐　元稹

蜘蛛天下足巴蜀就中多

世ガイニ多キクモノ中ニモ多キハレヨクノクニナリ縫隙容長

蹄虚空織横羅スコレノスキアイカニテコクノニテスヲカル

縈纏傷竹柏嚼啜及黄蛾

木タナヲメクリ之ヒ為送佳人喜

珠櫛無奈何ヒトコロテモ巣ヲカケニコリイルナリトゾ

蚕眉。蚕蘭。蚕蛾。眉ゝ。

。眉と作る時といどゝ云ゝの

後蛾ゝ卵と産是と翌年の種子

俳　原さも長さもいゝら眉ゝ入　抑雪

枝蛙　木の枝ゝ居て鳴く故ゝ名づく。雨蛙ともいゝう

俳　多かゝる春ゝゝ入ゝ

ゝ鹿鹿　飛良　鹿袋角

。鹿茸。春落て四月ゝ生ゝ角茸

のゝゝく袋角ゝ斗も季を持ゝる

蟄子　異名　擁劍。虎蟬。蟬蜂

。桃棹子。蟹の属ゝ

初鰹。鰹一名の松魚。肥満臭。

堅魚。至て早ゝい美ゝ味ゝ

づゝく東都ゝて甚賞玩ゝ價尤貴

俳　ゝメいゝう一月ゝ入ゝ初松魚　風光

鰹釣　餌ゝ用ひずゝ牛の角

或ゝ鯨牙ゝ用ゝ

生節 鰹魚を四つに切て蒸し爛乾して脯とするなり其いまゝ堅硬なるゆゑ世俗よんでなまぶしといふ

必用

此部は四月要用の事又は天氣養生の法等を記す

日刻 己の日巳の刻事をなす日時の吉凶を用ゆべし月建く

出行作事 西の方に向いては今月天道西に行故

破軍向方

夜九ツ 未の方	夜八ツ 申の方	夜七ツ 酉の方	
朝六ツ 戌の方	朝五ツ 亥の方	昼四ツ 子の方	
昼九ツ 丑の方	昼八ツ 寅の方	昼七ツ 卯の方	
暮六ツ 辰の方	夜五ツ 巳の方	夜四ツ 午の方	

樂事 清和の天と云霞も露もなくして空の氣色翠さうろひ○更衣かゝふ地よし○木々の葉若やかなるの後山吹も咲のこり○牡丹芍薬盛り富貴花○郭公の初声○葵祭

天氣 曇りても北風強ければ晴る西南の風は雨なり梅雨の前西風続吹と云昼夜なく此風にて北国廻船来る○今月雹有

米麦○庚辰辛巳は雨降は米價貴し○丙寅丁卯は雨降は米麦○甲子庚申の日雷なれば禾に虫つく○今月雨多なれば麦よわし夜雨多なれば殊に麦を損す

養生 立夏の後四五日北斗辰巳は建を此日乾に来る疾風暴雨に當る人を傷ること急なり虛邪賊風とゝろ聖人これを矢石の如く避るゆゑ委しく丹経に見る

四月用意之品 左に記る

海蘿子干 今月こゝ色よろしく

七月七日もで干次しいろう
季ハ夏ともるゐ

黴不出法

天氣よろ時日よさして
そうれさえ箱ゑいま紙ゑ
てもそれ半紙張ヨおきて梅
雨のちこれをひゝけいかび
いろう幸さゝれゐ妙ゑ
衣服ゑもかくれおゝ
をれバかび生をること色

草木を伐法

この月諸
木をそれば
蛙をむしゝゐ〇菖蒲
の葉ゑきとい撰ゝてよの
ろきうさるゐ色ゝ五月ゑ
いろうて能葉いろるゐ

糊ふ虫ほうざる法

櫨の
葉を
おゐひゐゐて物けい日数
と経ても虫少ゝも生ゼど

四月飲食并料理献立

料理

汁

汁　すき　塩鳥　清
まさご　すくさ　ますび　やわらを

汁

さぎ　たいの子　鱠
うどゝ　あぢ
たい　えび玉ま　あわび
うどゝ　白瓜　ちゝび大こん　ゆ
あゆ　すぐきゐを作り
しそ　きうり　しそ
ゆ　せうが　ちそ

差味

こい
あゝせい

煮物

焼あゆ　竹の子　紅いも　塩鳥
竹の子　竹の子　竹の子　かも瓜
竹の子　竹の子　竹の子　竹の子
切り　竹の子　竹の子　竹の子
いせ海老　さや豆

吸物

まを
きすご

和會物

こいゝぐれ　いゝ
しそ　すゝみ
かいもう　青ちゝび

青あへ　だい　ちゝび　貝　まて
いり　ちゝび　ちゝび　ちゝび
ちゝび　ちゝび　ちゝび　ちゝび

精進

汁

丸ひしき　大こん　そのしたこと　なすび　たいこけ　竹の子　乗つと　うどん

ぜんまい　茶茸　ゆを

清汁

ねいも　ぎんさい　ふくさん　油あげ　なと豆

膾

きくらげ　わかめ　大根　きそ　ちくか　あさうり　あまぜうが　くらげ　しとで

あげとうふ　ふくさん　のこ　ぜんまい　ちくらげ　やなぎ　くらげ

差味

特之茄子　引ささげ　くらげ　ちくめ　ぶし

青豆　いんけ

煮物

竹の子　ねいも　ちくめ　ぶし　竹の子　ぜいも

ふとのこと　なすび　しけの子　くらい

大きい　なが

和會物

きくらげ　さんしょう　さいが

さやまめ　さや豆　ぜんまい　ぎんなん　まくなし　あへ

時物

魚

鯉。生節。あじ。鱒。鱧。干ども。千鰯。

塩鳥賊　鷺。青さぎ。五位。鷺。塩鳥ゐい

さすご

鳥

青物

苣の薹。青さんしょう。かりがね。ちくらひ白。

たんきび。蕗。くこ。蓴さい。

根いも。あらぎ。うこ。

海松。もづく。ちいき。なまこい。

ちくまんそ。ゐ井房。山うど。

ちくがめこ。ちそ。茗荷。

白うり。きうり。かも瓜。青白。

あしせのとう。竹の子。ちそこ豆。

さやえん。かいとうな。ふうせん

まそ。

ちくがし

ちくらげ

酒味醫ざる法

夏い酒の味酸くなり

安一酒壹升の中へ樫の葉十五枚ゞ入まゞ味ひ少しをかくべし

貯竹筍法

盛り過ぎ終る時分

しるゝ三十日過るまでも生なて貯んと思ゞ随分よく大筍を

そうさぬる井の中へはりさげ水際を放し置き水氣の入らぬゆゑ五月上旬比筍の終りを六月中はなり

同法 皮を去り少し損ぎ切捨て節の間に塩を一ぱい入れ桶にるべよく重もかさを蓋をしておりとかをくべし

又法 皮を去り熱湯をそゆべきこれを紙にくべしそを用ゐ時白水にをうして用色白くしてよし

茄久り貯法 茄子を桶に入蓋して河の瀬早き処に埋め石をおをしたけをくるしのまぞも生をそよく持つ

国立公文書館
National Archives of Japan